

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会） 復活節集会

復活のキリスト

――マルコ伝第16章1～11節――

1965年4月18日

小池辰雄

贖罪の裏付け マグダラのマリヤ 白き衣を著たる若者 霊的空間 神の証者 実質をもった
霊生 霊生の恩寵 目からキリストの霊光 主は近くあり給う 『キリストの復活』 目が開け
る 決定的勝利

【マルコ16・1～18】

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、
イエスに抹^ぬらんとて香料を買い、2一週の首^{はじめ}の日、日の出でたる頃いと早く
墓にゆく。3誰か我らの為に墓の入口より石を転^{まろ}ばすべきと語り合いしに、
4目を挙ぐれば、石の既に転^はしあるを見る。この石は甚^{はなは}だ大なりき。5墓に
入り、右の方に白き衣を著^きたる若者の坐するを見て甚^{いた}く驚く。6若者いう『お
どろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に
甦^こりて、此処^{いまま}に在さず。視よ、納めし処は此処なり。7然れど往きて、弟子
たちとペテロとに告げよ』汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処^{かしこ}にて謁^{まみ}
ゆるを得ん、曾^{かつ}て汝らに言い給いしが如し』8女等いたく驚きをののき、墓
より逃げ出でしが、懼^{おそ}れたれば一言をも人に語らざりき。

9一週の首の日の払^{あかつき}暁、イエス甦^こりて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、
前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。10マリヤ往きて、イエ
スと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。11彼らイエスの活
き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

●贖罪の裏付け

この前、キリストの十字架の恩寵に与かりましたが、今日は甦^こりのキリストに出会おう
というわけです。復活の記事は、マタイ伝の28章1節から10節、マルコ伝は16章1節から
8節、ルカ伝は23章56節から24章11節までです。

金曜日の午後3時に十字架上でこの地上の仕事を、

「わがこと終りぬ」

と言つて、終わられまして、驚くべき絶叫をもつて十字架上から叫ばれたときに、至聖所



と聖所の間の幕が二つに裂かれた。即ち、旧約の宗教は完全にこれで乗り越えられて、羔羊（こひつじ）キリストの血によつて贖いは完了し、そして、その大祭司としての偉大な執成しを終えられたわけです。そのことはヘブル書に非常にはつきりと書いてあります。ヘブル書9章11節に、

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大（高次）なる全き幕屋を経て、¹² 山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

即ち、十字架のことです。

永遠の贖罪を終えたまえり。……¹⁴ 永遠の御霊により瑕なくして己を神に獻げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。¹⁵ この故に彼は新しき契約の中保なり。云々」（ヘブル9・11～15）

と書いてあります。

それで、贖罪の大業が果たされたわけですが、贖罪の裏付けのもとに今度は、キリストの喜びの音信の一番の内容であるところの永遠の生命を証しすべく――

「彼は三日目には甦るべし」

という、

「甦らざるを得ない、必ず甦る、どうしても甦る」

という強い言い方ですが――即ち、十字架から数えて翌々日の朝に、既に大きな墓の扉石は蹴倒されて、彼は決定的な勝利をなして、立ち上がられたわけです。

●マグダラのマリヤ

今までマルコ伝に従ってきましたから、記事はマルコ伝によつて少しく進めていきます。マルコ伝16章の始めから、

「安息日終りし時、

ということは、向こうの安息日はユダヤ人には、こちらでいうと土曜日ですが、土曜日の夕方の六時頃が、

「安息日が終わった」

ということですよ。あちらでは、ご承知のとおり、金曜の夕方から土曜の夕方までは一切、活動を停止します。私もあちらに旅をしたときに、ちょうどそれにぶつかりました。汽車も電車も自動車もみんな止まってしまう。一切の煮炊きはしない。あいかわらずユダヤ人はこの戒律を守っている。安息日明けになると、動きだすわけです。即ち、陽が没すると、それから活動を始める。

「夕あり、朝あり、これ始めの日なり」



というので、ユダヤ人は夕方から、日没から数える不思議な民です。

マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、

どの記事を見ても、この

「マグダラのマリヤ」

というのが、復活のキリストに非常に深い関係をもっている。「マグダラのマリヤ」という言葉がどれにも一番先に出てくる。

十字架のところにおいても、そうなんです。

「多くの女たちがある」

と言いながら、一番先に出てくるのは、マタイ伝27章56節でも、マルコ伝15章40節でも、

「⁵⁵その処にて遙かに望みいたる多くの女あり、イエスに事えてガリラヤより従い来りし者どもなり。⁵⁶その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもいたり。」（マタイ27・55～56）

「⁴⁰また遙かに望み居たる女等あり、その中にはマグダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ及びサロメなども居たり。」（マルコ15・40）

と。

「その中には、マグダラのマリヤ云々」

と言つて、マグダラのマリヤというものが劈頭第一に名前が出てくるというのは、何か不思議な感じがするわけです。

マグダラという所は、私もそのわきを通つて行きましたが、今は全く人がいるかいなかというような寒村です。これが、七つの悪鬼に憑かれていた女性であり、また、どういふ素行であつたか知りませんが、とにかく、だいぶやつかいな女性であつたらしい。それが完全にキリストに救われたわけで、悪鬼を追いだされて、キリストの御霊によつて清められ強められた女性です。救われることの非常に深かっただけ、このイエスに非常に感謝しました慕つていたのだらうと思います。

●白き衣を著たる若者

イエスに抹らんとて香料を買い、²一週^{はじめ}の首の日、日の出でたる頃朝の6時頃です。

いと早く墓にゆく。³誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合
いしに、

女性ですから、とても重くて我々の手にはおえないと。

⁴目を挙げれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。⁵墓に
入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。

この若者はもちろん天使です。かつて、私たちの集会においても、あるクリスマスに、集まつ



た人たちの後ろに白い衣を着て白い羽をつけた天使が二人ずつ立っているのを見た人があります。非常な特別な時に天使が現れる。

「幼子らを天使が守っている」

とキリストも言っておられた。その天使は神の御前にはべつっている。また、天使のことは旧約聖書にも、イザヤやエゼキエルあたりはみな靈幻のうちに、幻のうちにでつくわしているわけです。また、イエスの誕生の時も、天使の御告げというものがマリヤに来て、イエスはエジプトに一時逃れるというようなこともあるわけです。実に不思議な靈界です。そんなことは予想していなかったものですから、

「甚く驚く」

と、そのまま書いてある。全く驚いてしまつて、言葉も出ないような始末です。マタイ伝の方にも、

「²視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を^{まろ}転ばし退け、

「主の使」即ち、天使が転ばし退けて、

その上に坐したるなり。³その状は^{さむ}電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。⁴守の者ども^{まもり}彼を^{おそ}懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。」（マタイ28・2～4）

とある。マタイ伝の方には非常に靈的な輝かしい、また強烈な現実であることをまざまざとそこに描いてある。天使ではなくても、イエス・キリスト自身があの変貌の山において、真白く輝かれて、弟子たちはまばゆくてまともに見れず、そこに平伏してしまつたとある。

その天使の場所が記事によつていろいろ違つていても、ここに現れたことだけは事実である。ルカ伝の方によると、

「⁴これが^{うろた}為に狼狽えおりに、視よ、輝ける衣を^き著たる二人の人その傍らに立てり。⁵女たち懼れて^{かお}面を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、⁶彼は此処に在さず、甦り給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを^{おも}憶い出でよ。』（ルカ24・4～6）

とある。マルコ伝によると、

⁶若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、⁷此処に在さず。視よ、納めし^{ここ}処は此処なり。⁷然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ』汝らに先だちてガリラヤに往き給う、^{かしこ}彼処にて^{まみ}謁ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し』

マタイでも、

「⁵御使、こたえて女たちに言う『なんじら懼るな、我なんじらが十字架につ



けられ給いしイエスを尋ねるを知る。6 此処には在^{いま}さず、その言える如く甦り給えり。来りてその置かれ給いし処を見よ。7 かつ速^{すみや}かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦り給えり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼^{かしこ}処にて^{まみ}調ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』（マタイ28・5～7）

というわけです。一番先に墓場に出かけて行つた女の人たちは香料を塗るために行つたんですが、これはみんなそういうありさまであつて、天使にぶつかり、また、弟子たちに告げる。彼らはみんな懼^{おそ}れ戦^{おの}いたというわけです。

キリストは既に三回、

「自分は十字架について苦難を受けてから甦る」

ということをつたひ弟子どもに語つておられる。

「懼れたれば一言をも人に語らざき」

とある。非常に喜ぶかと思つたら、とにかく驚いて恐がつてしまつたというわけです。いかにすべて、彼らがキリストの言葉を信じていなかったか。また、甦りの現実というものがいかに十字架と、暗黒と光の対照をなすところの、想像を絶するところの事態であるかということが、この記事のどれを読みましても、私たちが正直、福音書から直接受ける印象です。

●霊的空間

マタイ伝28章9節を見ると、

「9 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』と言ひ給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拝す。」

とある。

「心安かれ」

と言われた。

「騒ぐな、波立つな、恐れるな、疑うな」

と。「安かれ」というのは

「シャーローム」

という。今でも挨拶をするときに、この「シャーローム」という言葉を使うわけです。

「シャーローム・ラーケム」

「シャーローム・レカー」

とか、そういうような複数と単数の言い方があります。とにかく、この「シャーローム」という言葉が――甦りのキリストが

「安かれ、平安あれ」



と言われた――ユダヤ人の挨拶である。これはなにもイエス・キリストが復活の時に初めて言われた言葉ではない。もうギデオンの時代から、この「平安」という言葉はある。一番先に出てくるのは、あのギデオンに語られたヤーヴェーの言葉です。「平安あれ。安かれ」という。

「心騒がすな、我なり。懼るな、心安かれ」

と、ペテロに波の上のイエス・キリストも言われたわけです。なにか霊的な次元が、今までと違った次元が出てくると――幽霊だつて、我々はひょつこりでつくわしたら――恐れあわてふためくかも知れないが、決してそういうことは要らん。本当の世界は、本当の現実、霊生、霊の生命はなにもむずかしいことはない。

私は、「キリストの霊生」という題でいつか詩を私は書きましたが。

（註：「キリストの霊生」1954復活節に作。小池辰雄著作集第八巻『詩歌集』127頁に収録。「お父様、彼らを赦してやって下さい。／何をしているのかわからないのです。／パリサイの祭司、学者、長老と霊盲の民衆のため、／イエスはかく祈つた――底ぬけの愛。それもあざけりで報いられつつ。／母マリヤと愛弟子を顧みて、／「見よ、おまえの母だ」、「見よ、おまえの子だ」。／信徒を想い、心のなかで／「兄弟姉妹よ、相愛せよ。」／心碎けた傍えなる十字架の盗賊に、「私は本当におまえに言う、／今日おまえは私と一緒に／パラダイス入りだよ！」／抱くようにイエスは語つた。／キリストの血の滴りが／時を刻む。時の歯車は／人の子の宝血をしぼる。／肉体は砂漠の如く「渇く！」／たましいは神の愛に飢えつつ。／凄絶なる現実である。／「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ！」／「神様、神様、何で私をお棄てになった……？」／血の叫び、はりつけのままなるイエスの。／この断腸の雄叫びに／つづくは断末の霊的絶叫！／地は震い、岩は裂けた。／墓は開き、聖所の幕も真つ二つ！／天地晦冥。／絶語の聖憤、雷霆を轟かせ、／万斛の聖涙白虹に滴る。／万剣天に潤えば、聖旨畏み、／「お父様、私の霊を聖手にゆだねます。」／いやはてに独白一言、／「事は畢つた！」／人の子は首を垂れた。……）」

私たちがこうやって生きているのも、一番深いところでは、実は魂が生きているんです。魂が生きているので、その魂が本当に魂の呼吸する世界にいないものだから、本当の魂の霊の世界がそこに開示してくると、本当に呼吸していないものだから、魂が恐れたりあわてたりする。本当にその世界にいれば、

「ああ、イエス・キリストはどんなことがあつても、霊体をもつて頭れざるを得ない方である」

と感ずる。もし、弟子の中に本当にそれだけのことを信じて、

「さあ、キリストは今に甦るぞ。それみたことか」

と言うやつが一人でもいたら、それは大したもんですが、一人もいなかった。

あの驚くべき霊生を宿しておられるところの、受肉体であるところの――神の霊が本当に肉となって現象し、福音書においてその神の言を発し神の業を為していた――このイエス・キリストに直々にあんなにも弟子たちは親しんでいたのに、実は本当に彼らは近くは



なかった。空間的には近いけれども、霊的にはズレている。そこにボールがかかっている。そこに深淵が横たわっている。だから、

「みんな、私に躓くぞ」

と言われた。躓くのは、霊の世界にいないから躓く。躓の石だと。

「けれども、今に、私がお前たちのところに本当にやってくる。その時には、私の言ったこと、したことがみんなよく呑み込めてくるぞ」

と。ということは要するに、

「お前たちの魂が本当に霊生を生きることになり、霊的空間の中に生きることになったら」

ということ。霊的空間とは、何もどこか山の中へ入るということではない。この地上、今我々のいるこの場所が即ち同時に霊的空間をもっている。

「天国はここかしこにあらず。汝らの間に、また汝らの中にある」

という「天国」というのは、そういった霊的空間のことです。神さまの霊生が貫き浸透し、神の霊なる意志が行われるところが即ち霊的空間という。

●神の証者

「安かれ」と言うんですが、しかし、本当にそこで「安く」ならない。一時的には、「安く」なるけれども、平安に入るけれども。

「⁹ 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』と言い給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拜す。¹⁰ 爰にイエス言いたもう『懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処にて我を見るべきことを知らせよ』」(マタイ 28・9～10)

と。ガリラヤに凱旋するわけです。イエスはエルサレムに向かって進軍して行つて、ついにエルサレムで十字架の大敗北をしたかと思つたらば、これは大敗北ではない。十字架は大きな担いである。最大の担いである。みんなが、

「俺は勝つた。あいつは罰した。それみろ」

なんていうわけで、散々悪口言つたり、罵つたり、

「人を救つて、自分を救うことのできないやつだ」

なんて勝手なことを言つて、瀆^{とくしん}神的な、神を瀆^{けが}すことを言っている。瀆しごとを言う。聖霊に逆らっている。あれは聖霊に逆らっている罪です。けれども、それはみんなイエスは担う。

こないだ、私たちは学びましたように、あの十字架上の七つの言葉をもつて、キリストは完全に担った。あの七つの言葉がいかに不思議な構造をもっているかはこないだ学びましたね。そういう担いの十字架です。十字架の担いは更にこの復活のキリストの生命をもつ



て、

「天国を汝らに、永遠の生命を汝らに」

と言った御言は全部、この復活のキリスト自身が実証されたわけです。もう既に平常から実証しておられるけれども、ここにいよいよ決定的な実証をなされた。彼が最大の証人である。神の証人では、イエス・キリストはケタ違いの証人である。神の証者である。

「自分は何もできない。何も言えない。善くもない。神さまだけだ。一切を為

し給う者は、一切を言い給う者は、善なる者は、義なる者は、愛なる者は、

神だけだ」

と言う人が本当に神の証人となる。

●実質をもった霊生

甦りというのは決して、「復た活き返った」なんていう、息を吹き返したことではない。

「血気の体あり、霊の体あり」

と、キリストの復活のことはパウロがコリント前書15章で徹底的に語っています。コリント前書というのは素晴らしい書簡だね。13章では愛を徹底的に、15章ではこの復活のキリスト、1と2章のところでは聖霊の、また十字架のキリストを語っている。

私たちは、普段こうやって生きているから、それほど復活のキリストということをそう直々に思わないかもしれない。こないだ何か読んだら、

「無教会は教会よりも信仰が生き生きしていると人々も言うし、自分も自任している」

と、またそんなことを書いてある。少し信仰の元気がよくて、そして

「甦りのキリストを信じる」

なんて、大体やってますよ。悪くないよ。けれども、本当に霊体をもつて甦れたその自在な――姿を顕すもまた姿を消すのも自在であり、決してそれはいわゆる幽霊でなくて、実体をそなえているところの、霊体をそなえているところの――このキリストの現実というもの、我々の想像を絶するところの驚くべきことです。それだけの自在な、しかも実質をもった霊生というもの、これをキリストは証しされた。これは絶対に私たちがこの御霊の現実に入るまでは、即ち、これから五十日あとのペンテコステを本当に経なければ、復活のキリストはつかめない。実は、五十日あとの課題である。

けれども、あれは事実としては五十日あとであつたけれども、私たちにおきましては、この十字架と復活のキリストと聖霊のキリストは切っても切ることができない。中にちゃんとそなわっている。「キリスト」と言えば、その中には

「十字架のキリスト・復活のキリスト・御霊なるキリスト」

という――「キリスト」という一言の中に、



「主イエス・キリストよ」

と言うときに――この三つのものが、分析できないところの渾然たるものをもつて魂に響いてこなかったならば、信仰は健全でない。私たちは本当に健全なる信仰の事態です。何か一面が非常に強調されて、それで「ワッショイワッショイ」というようなそういう信仰ではない。霊肉渾然として霊体――またその次には霊肉だ、霊的な肉だ――霊および体が本当に霊において渾然たるこの生命です。その生命の根源現実を今、私たちのこの破れ器の中にいただく。

十字架を担い給うたところのイエスという方は、何か宗教的な殉教的な悲愴な方ということではない。十字架を担い得るということは、彼が既に霊生を本当に持っているから。そして、一切の罪なきところの聖き彼であり、疵^{きず}なき彼であるから。ということは、霊生に生きていなければ、そうでないんだから。何か物が疵がないというのは違うんだ、この「疵がない」ということは。信仰の世界で神におけるモーセの十誡の一番根底的な満たし方において、キリストは義人である。罪なき義人である。

また無教会のことを言うけれども、いろんな偉い先生が出たよね。その追憶なんか書くというと、もう頭から尻尾まで誉めてしまう。藤井武先生は、

「自分のことをそんなに誉めたら、蹴飛ばすぞ」

なんて、私たちに言われたくらいです。

「私はキリストの十字架によらなければ生きていられない」

と言う。内村先生もそうです。人間というものは誰だって、功罪があるんですよ。何もその罪のことを取り上げて言う必要はないけれども。そんないい気持なんかしませんよ、人の罪のことなんか言うのは。けれども、頭から尻尾までその人を誉めたのでは、それはイエス・キリストの名を本当に讃えていることではない。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言った、あの驚くべき、生まれ変わってしまったところのパウロは素晴らしい人です。けれども、彼のその素晴らしきはみなキリストの光における、この霊生における、贖いにおける素晴らしさである。

キリストの十字架と言うときに、本当に霊生を生きたとこのキリストということを思わないで、十字架というただ犠牲の死なんて思ったら、とんでもない話です。贖いとは、彼が本当の霊生を、聖なる生命を――

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」

というこの生命を――彼が証し、また、この世にないところの本当の愛を行じ、一切の悩める者、悲しめる者、死せる者を甦らすだけの愛の力を持っておられる。十字架と言うときに、もう既にそこに霊的な生命があったればこそ、義を全うされたからこそこの十字架です。この「義」というのは道徳的な義ではない。旧約聖書における義よりもっと凄いんだから、



キリストの義というのは。預言者たちがこれを慕ってやまなかったところの義を現した者がこのキリストです。だから、

「いと小さき天国の者も預言者よりも偉大である」

とキリストが言われた、その義です。

十字架のキリストは、そのような既に霊的なキリストでなければ、十字架が担われなかったということ。また、その霊生を生きたキリストでなければ、甦りはできなかった。正にこのキリストなるがゆえに、どんなに聖書の記事が不完全でありましても、

「イエス・キリストが甦らなかつたら、もう一切は空しい」

とパウロが言っているのは、本当にその通りです。

●霊生の恩寵

ちよつと、コリント前書15章を見てみましょうか。

「4 また葬られ、聖書に应じて三日目に甦り、⁵ ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給いし事なり。⁶ 次に五百人以上の兄弟に同時にあらわれ給えり。その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なお世にあり。⁷ 次にヤコブに現れ、次にすべての使徒に現れ、⁸ 最終には月足らぬ者のごとき我にも現れ給えり。

ダマスコ途上の経験のことを言うわけです。

……¹⁰ 然るに我が今の如くなるは、神の恩恵に由るなり。斯てその賜わりし御恵は空しくならずして、凡ての使徒よりも我は多く働けり。……

¹² キリストは死人の中より甦り給えりと宣伝うるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云う者のあるは何ぞや。¹³ もし死人の復活なくば、キリストもまた甦り給わざりしならん。¹⁴ もしキリスト甦り給わざりしならば、我らの宣

教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん」(コリント前書15・4、14)

死また陰府に、サタンの力に打ち勝った。死を諦めるのでもなければ、死を悟るのでもない。仏教の世界はこの悟りです。相対的な生や相対的な死を超越した悟りの世界に入る。涅槃ということ。けれども、イエス・キリストは、この福音は死を征服し、今、現に私たちがいつ仆れましようとも、既に死を征服しているというキリストの御霊における霊生の恩寵です。

人生は、やれ何が幸福だ、何が不幸だなんて言いましても、どんなに幸福そうに見えても、このイエス・キリストの大歡喜の生命をもたなかつたら、それは決して本当の幸福ではない。どんなに惨憺として不幸そうに見えても、このキリストの生命を持っている人は本当の幸いです。私はもし「幸福論」というのを書くなら、はつきりとそう書く。本当の幸いとは何かということは、いかなる環境、いかなる運命にでつくわしましても、

「なお勝ちえて余りあり」



とパウロがロマ書8章で言ったところの、これを持っているか持っていないかということ。そうですよ。

「どうも、私はいろんな人と比べると不幸で、運命も才能もなく、どうなの」

なんて、何を言っているか。人間の最大のものは、誰でもが絶対無条件に得られるところの、このイエス・キリストの生命です。

「死んでも死なない」

どころではない。本当に人を活かすところの、太陽のように一切を明るくするところの、人に生命を与えるところのものです。

●目からキリストの靈光

この頃は、私は朝ごとに、どれくらい新芽が伸びているかと、起きて庭に出て見るのが非常に楽しみです。本当に今、生き生きと若葉が緑してくるし、花がいつのまにか咲いてしまうね。山吹なんていうのは、黄金色の花が咲いている。

これ（講筵の題紙）は、復活のキリストが、ここに黄色い色がちゃんとそこに映っているのが見えるかね。さつき、これを墨で書いてくださいと言われたが、私はせっかく光を与えておいたから、ちよつと墨で塗るわけにいかない。私のすることはみなそういった気持ちをもってやっている。いい加減にやっているのではない。

今は、万物が太陽の光を受け、その熱を受けて、すくすくと伸びている。キリストの甦りのときが、こういった春先にある。それが復活節とされている。何か非常に意味があるわけです。いわんや、万物のそういった草木の甦り、春の甦り以上に、この福音を持っている人たちを見て、

「あつ、あの人はえらく生命が靈生に光っている。私は太陽の光よりもあの人に接

して、私の芽が吹いてきた」

なんて、植物が言うような人になつたら、それは非常に素晴らしい。

「日の光を要せず、汝は我に近づけば、我は花咲く」

なんて、植物が言つたら、その人はこの植物を本当に愛しまた活かすところの存在である。また、私たちはこの植物を見ながら、実は私たちの目からキリストのそのような靈光が射して、見ているうちに花咲くなんていうような――私はお伽話を書くなら、そんなお伽話を書きたいね――そういうような現実を受けとることです。私たちは何も年中行事に復活節が来るから、その時は大勢集まつてどうのなんて、そんなことではない。

ゲーテあの『ファウスト』の始めの方で、もう一切のものを知り尽くして、

「医学も哲学も法学も、あらずもがなの神学もやってみたけれども、自分は結局、何も分からないということが分かった」

なんて、知の世界で絶望した。そして、



「俺は毒杯を飲むよりもう仕方がない」

と言って、毒杯を手にし口に当てた瞬間に、子供たちが甦りの歌をうたっているの、小さいときのことを思い出して、毒杯を飲むことをやめたと書いてある。さすがに、ゲートの描写は素晴らしい。死を思いとどまらせたものは、あの甦りの歌です。

皆さんはまだ、讃美歌がまずいね。今日は復活節だというなら、節はともかくも、ああいう歌は自分で高らかに歌ってこなくては。そして、もつと力強いところの歌い方をしてくれなければ、あれでは草木が眠ってしまうよ（笑）。甦るところのさわぎではない。お眠りなさいなんてなことだ。もう少し元気を出してくださいよ。どうもまだ――小言ではないけれども――そこらのはりをみんな持っていたきたい。

「よし、今度は復活節だから大いに練習しておこうではないか」
それは歌のための歌ではないですよ。

●主は近くあり給う

これは「天使のコーラス」としてゲートが書いたんですが、とにかく、ゲートというのは驚くべき詩人です。ドイツ語としてもこれほど美しいドイツ語はない。

「キリストは甦り給った、

朽ち果てるところの大地の中から。

お前たち、喜んで諸々のきずなを断ち切れ。

キリストの自由闊達なる、自由無礙なるこの生命を受けよ。

行動をもって彼を誉めたたたえる者、

愛をそこに証する者、

誰でも兄弟に、おなががいいたらば食べ物を施してやる者、

旅をしながら福音を述べ伝える者、

喜びを約束する者たち、

その人たちにこの主は近くあり給う。

そうやって実証するところにこそ彼はいる。」

と。「近い」という言葉はここにもゲートは書きましたが、さきほど読まれたところに、「近づく」という言葉がある。エマオ途上の二人の旅人にキリストは近づいて、二人ではなかった、実は三人であった。

私たちがどこを旅しようと、また、どこでご飯をいただこうと、その人数プラス一人という人数である。七人であつたら、本当は八人。五人で旅をしていたら、本当は六人。その一人を忘れてはいかん。いつも近づいて共にあるところのもの。たった一人であつても、皆さんは一人ではない。必ず二人である。孤独ということはない。本当の単独者というのは、それは単におけるこの双である。単独でなくて、双、独なんだ。



「甦りのキリストは五百人の者に同時に現れた」

とあつたでしょ。霊界はそういうものですからね。皆さん一人びとりのうちに――」

あの人にキリストがついているから、私の方には来ないか」

なんて冗談じゃない――イエス・キリストは誰にでも御霊をもつて来てくださる。それが霊界の神秘です。

そのキリストと共に私たちはおり、また共に歩き、共に仕事をし、何でも共にする。「共に」というのは、イエス・キリストが本当に「^{うち}の中に」という、御霊をもつて「中」ということがなければ、「共に」ということは空言になる。御霊がうちに内在するときに初めて、

「主と共に」

ということがあるので、御霊の内在がないところには、「中」がないところには、「共」は本当の「共」にならない。

戸を閉じたところに弟子たちが集まっていたら、そこへキリストは入ってきた。どうして、入れるか。そして、

「私は幽霊でないから。お魚があるか、それでは食べてやる」

と言って、お魚を食べた。

「へえ、先生はそんなことを信じるんですか」

「はい、信じます」

と。キリストの現実――学者はいろいろ研究する。ドイツ語の本を見ると、

「そういうのは後から付け加えた。どこからどこまでは後からの付加だ」

なんていうことを書いてある。付加でも何でもいい――付加せざるを得ないような、実は現実であつた。まだその時によく分からなかっただけです。プロテスタントの信仰は非常にそういうところが頭の方に、ヘタすると切り替わる。むしろ、カトリックの方がその神秘の世界のつかみ方においてはより深いものが伝統的にはあるようです。これは私は何も現象的な不可思議を強調しているのではない。本当の霊的現実というものは、人間は罪びとだからまたこの空間は罪の世の空間であるから、その現実が直ちに現象するのはイエス・キリストの他にはないわけです。

私が非常に霊的なカリスマ的な人間だったら、

「まあ、先生はそうだろうけれども」

なんてなことになってしまうが、私はひとつもそうではない。けれども、私はこのキリストの御霊の生命の現実については、誰人にも一步も退かざる信をいただいております。

復活のキリストの記事を読むと、

「その通り。正にそうでしょう。まだまだこれは書き足りないで、その喜びの光の事実をもつと素晴らしかったんでしょう」

と、言いたいわけです。どうか、皆さんは、我々の日常の現実において常に十字架と復活



節とペンテコステを現実に生き生きと展開しながら生きていくことです。

●『キリストの復活』

『キリストの復活』というゴードイ（アルフレッド・ゴディ1828～1911 スイスのプロテスタント（改革派）の神学者）さんが書いた事態を私の兄が昔々、仕事をしながら訳した。それを藤井先生が出してくださった。誰もこれを顧みない本ですけれども。

今度、少しこれを読んでみて驚いた。私は昔は読めてなかったんだなと。なぜ読めなかったかというと、やはり本当に聖霊のバプテスマを受けてないと、この素晴らしさが読めない。ことに終りの方が凄い。この本にこんなに御霊のことが、御霊の霊生のことが書いてあったかと驚いた。さすがにゴードイという人は偉い人だ。学者ならざるどころの霊的な註解者であったということを知るんです。無教会の方々はそこがどれだけわかってるか。藤井先生が非常に評価してくださった。その一部分を読みますと、

「我々の周囲なる動物と植物とが複合し、また両者のうちには完全なる天然を認める。同様に将来の身体も新しき栄えのうちなる、空虚と死とより免れたところの天然の中心にあるであらう。人のみでない。聖パウロの言葉をかりれば、すべての造られしものが本能的に深く望みつつあるところの理想は実現されるであらう。この土の上における生命の泉であり源であった、うち見るところ粗雑なる万物は、生命の友として御霊の力により携え挙げられ、うるわしき天地となりて、新しき主、霊の身体の活動と到着とを迎えるであらう。物は必ずしも霊を捕うるものにあらず。また、霊の活動の障害にあらず。芸術家の従順なる力ある手、彼がその傑作を生み出す材料を見れば明らかであらう。芸術はいつか聖なるものの愛となり光となるべく栄光の序曲にすぎない。重ねて説く、自然のうちにありて無意識の生命は官能の奴隷であった。歴史の時代に至って人の魂はその自覚せる自由なる生命を豊かに示した。イエス・キリストに新しきものは実現せられ、彼によって我らに伝えられし聖愛の生命である。最後に我らが天というかしこにおいて実質において神のものであり、形式においても人なる完全なる生命は、その時は栄化されしものととして溢れ輝くであらう。云々」

と。我々の未来に、本当に霊肉渾然とした輝かしい霊的な現実を非常に強調して書いてあるわけです。

●目が開ける

もう大体、私たちはこれで学ぶべきことは学んだと思うんですが。さきほどのルカ伝24章のところをちょっと開いてください。これはかつて私は皆さんに申し上げたところでもあるけれども、24章30節のところに、

「³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、



31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。」（ルカ 24・30・31）

とある。弟子たちは、イエスが最後の晩餐の時のような、パンを取りて祝し、さいて与え給うたとき、

「ああ、これは本当にイエスだ」

と、その時初めて見知らぬ旅人の正体が見えた。それで、「目が開けた」という。今までだつて見てただけでも、その時に目が開ける。パウロも

「目より鱗の如きもの落ちたり」

というときも、目が開けた。目が開けたらば、もつとはつきり見えるかと思つたら、イエスは姿を消してしまった。

新しい方もいらつしやるから申し上げるわけですが、私たちが本当に

「目が開ける」

とは、これはもう理屈の世界ではない。本当に目が開けるためには、その人はとにかく、いかなる意味においても、自我があつたら開けない。自我というものが己を立てているうちは、また、己の理性とか、己の感情とか、己の知識というものを、とにかく己の側を立てているうちは開けない。キリストのこの霊の現実、キリストの神の現実に対しては、魂が、全存在そのものが本当に平伏しにならないと。福音書を私たちが読んで、また、こういった復活の記事を読んで、

「へえ」

と言つて驚いたり怪しんでいるうちは、絶対に目が開けない。弟子たちもこれをなかなか信じないと書いてある。ちつとも、彼らは目が開けない。もう仕方がないから、キリストは彼らの目が開かれるために言われた。

「しつかり、祈っている。一緒に祈っている」

と。それで、十日間、彼らはとにかく一生懸命に祈つた。そして、聖霊の風が吹いてきて、目が開けることになる。

祈りの世界は、我を投入することですから、神さまの前に本当に自分を投げ出すことですから、そこで初めて目が開けてくる。もちろん、このときにこの二人の旅人はこれで直ちに本当の救いに入つたというわけではない。けれども、

「キリストは本当に生きておられた。幻ではなかった」

と言つて、愕然として自分の経験や自分のおもわくやいろんなものがそこで外された。そうしたらば、キリストという実体がこの二人の全存在の中に入ってきた。見えなくなった。見えなくなるとは、自分のうちにイエス・キリストが入ってくる。そして今度は、そのキリストの生命をもつて、光をもつて、ものを見ていく。見る目をうちに持つ。キリストをうちに迎えて、御霊のキリストを、復活のキリストを私たちの生命として初めて、復活の



キリストということが私たちに――「について」ではなく――告白できることになる。我々が本当に甦って、イエス・キリストをうちに迎え奉ることによって甦って、我々が本当に霊生を与えられているということが同時に「目が開かれた」ということであり、そして、活眼しましたから、本当にものが見えてくるということになる。皆さんが何をいたしましても、そこに本当の展開が始まるということは、絶対にこれは真理です。

●決定的勝利

私はこのあいだ新しい学校に行つて、一番先の時間にみんな一人ひとり自己紹介をした。私は最後に自己紹介して、始めはバカみたいなことを言ってますけれども、そして、こと宗教のことになってくるわけです。そうすると、

「へえ、そういう人か」

と、みんな驚いたような顔している。単なるドイツ語の授業ではないよ、というわけです。人間の魂は、内側から響くところの、何かしらんが本当の世界から発せられるところのものにぶつかるといって、新しいこと、今まで魂が本当に見たいもの、本当に響きを感じたものの、それを知らないでいたが、それを魂が見せしめられ、響きを、その音を受けとつて――人間の魂というものは偽りがありませんから――そこで何か感ずるわけです。

我々がイエス・キリストの甦りの生命をその意味において――この二人の者は目が開けたら、キリストが見えなくなった――いや、内側に入ってしまったから見えなくなったというように、私はその先をそのように読みたいわけです。

そうしたらば、今度は逆にものが見えてくる。そして、本当に福音書におけるところの、聖書におけるところのキリストが見えてくるし、旧約聖書は創世記から黙示録に到るまで、

「我につきて証しするものなり」

というイエス・キリストがその背後に見えてくる。

もうそうになると、本当のきつきの平安、安らかさです。何が来ても驚きませんよ。どんなに、どう波風が立ちましても、

「はいはい」

と大きく包むことも、大きく担うこともできる。もうへんてこな、ムキにならなくなる。そういうことが我々の中に生じてくる。

どうか、皆さん、この福音を受けたら、男といわず女といわず、若きといわず老いたりといわず、みな、本当の平安と本当の歓喜を――平安だけではまだ足りないような気がする。この喜びの音信を「福音」というんだ――福音を、喜びの音信を、喜び中の喜び、復活のキリストを受けとった者はもはや、相対的なことでどうのこうのなんていうのはよしませうや。もう、皆さんが本当に

「よーし」



というわけで、この気合で進んでいかないとするなら、それはキリストを受けないんだからしょうがない。どんなに辻褃をあわせようとしたって、どんなに力んだって、この世界に來なくてはダメです。そのかわり、この世界に行ったら――我々はお互いさまダメな人間です――けれども、必ず行きますよ。

私は京都に行つて、

「決定的勝利」

という題で最後に話をするが、本当に決定的な勝利です。イエス・キリストが決定的な勝利をなさった。この決定的な勝利を身に受けないで、

「それは、イエス・キリストは、決定的な勝利をなさったでしょうけれども」
なんていうようなクリスチャンはダメだ。それは魂に、

「絶対恩寵として、わがうちに決定的勝利、既にあり」

ということではなくては。

もう何かしらんが、皆さんは進んでいるでしょ。どうですか。皆さんは、いろいろ問題があるね。課題があつたり、問題があつたり、いろんなことがあるよ。

「けれども、私はそんなことに屈しません」

と。病をもっている方もあるし。大丈夫です。家庭的に何かおかしいことになっている方もあるかもしれない。大丈夫です。また、職業の上でどうも上役のやつは氣にくわないということもあるかもしれない。大丈夫です。勉強の上で何かあるかも知れない。大丈夫です。いいですか。イエス・キリストはそれ以下のものではないんですから。もう一切に処して、無条件に

「一切の秘訣を得たり」

という、その秘訣の世界にパウロと一緒に、ヨハネと一緒に、ペテロと一緒に入る。使徒たちが、なぜ、あのように突破し得たか。それは正に、甦りのキリストにまだうろたえていた弟子たちであつたが、私たちはもううろたえないで、

「この福音は、そうでなければならぬ。キリストは甦らないでいられるか。このイエス・キリストと共に私たちの生命が合わないでいられるか。もし、そうでなければ、私はもうクリスチャンはやめる」

というだけののはつきりしたものをもって行つてくださいます。おしまい。

